

繪本通俗三國志

八編

三

東 京 圖 書 館

七
五
冊

七
八
號

六
七
架

二
六
函

小
說
類

和
書
門



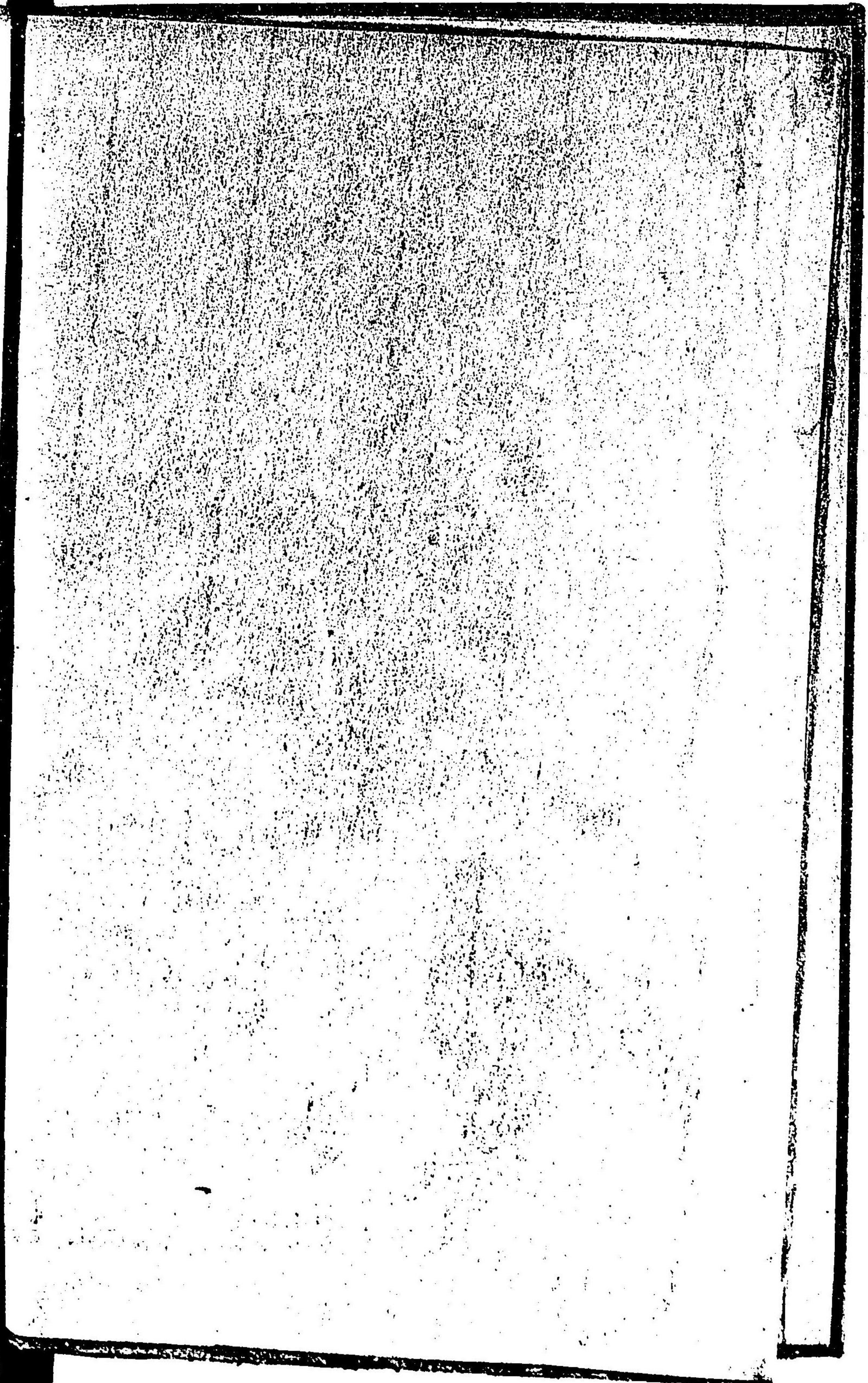
繪本通俗三國志八編卷之二

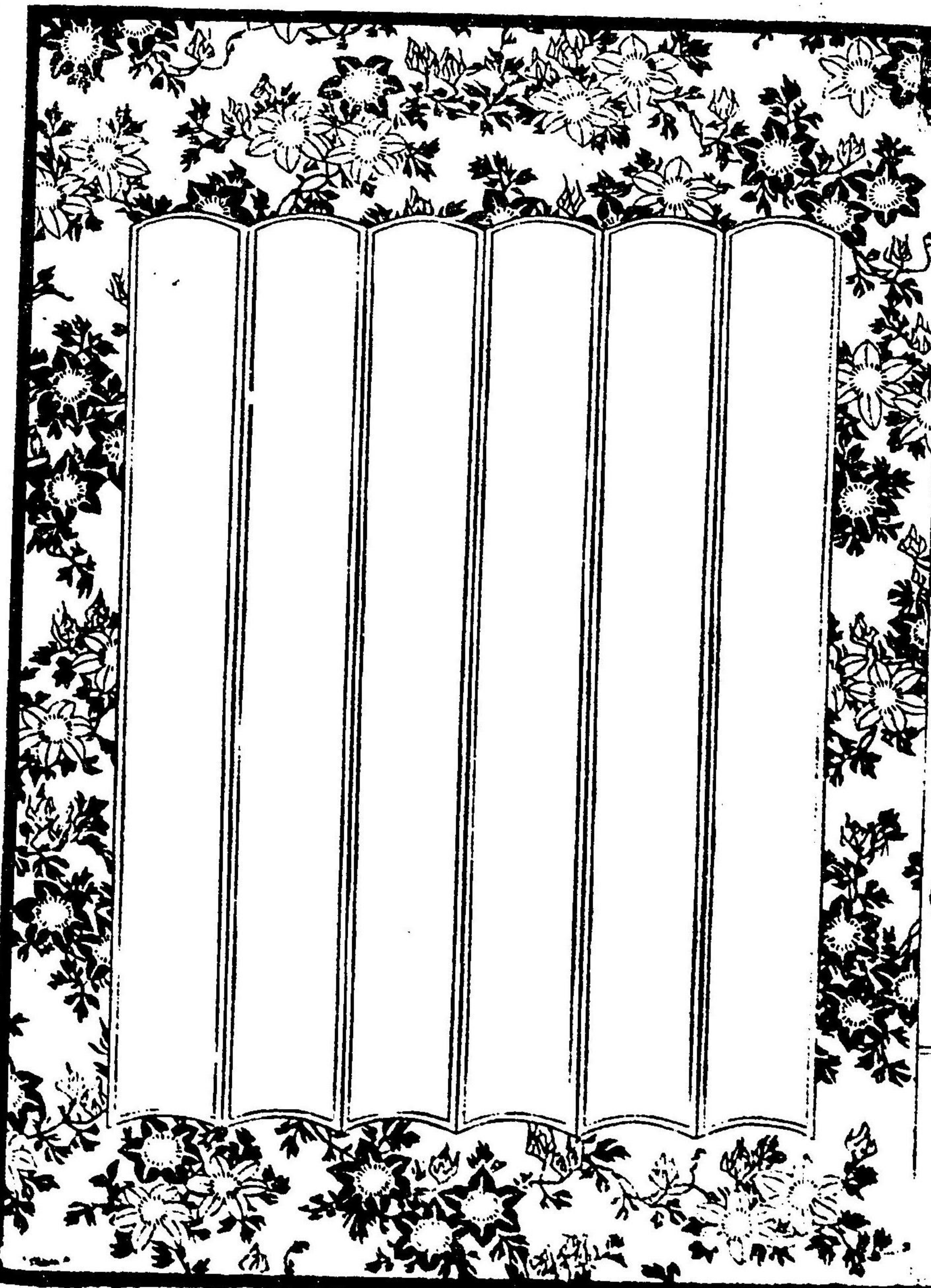
目錄 明治十年交換

鄧艾鍾會破漢中

姜維大戦劍門関

鄧艾越嶺襲成都





繪本通俗三國志八篇卷之三

鄧艾鍾會破漢中

去程こゝろの鍾會しゆんゑいのもろくの大將たいしやうを集あつめ、軍いんの評議ひやうぎを
 するに、系けいの大將たいしやうの田續でんじゆく、龐會ぱんゑい、田章でんぢやう、爰彰えんぢやう、丘建きよけん、王賁わうへん、夏
 候しやうこう、咸けん、皇甫閻くわうぼうえん、勾安こうあん等らを、宗徒しゆんた乃すなはちのこして、八十やそ余人にん
 護軍ごぐん胡烈これつ、監軍かんぐん衛瓘ゑいけんを、帳下ちやうかのあひまひり、鍾會しゆんゑい
 會ゑいや、ひらり、然しかるに、先手せんての大將たいしやうを、定め、山やまのあひまひ
 へ、路ちをとひらりせ、水みづの渡わたり、橋はしを、とり、けさせ、大軍たいぐん跡あとを
 志こころたぐひ、進すすま、し、ゆん、雜人ざひんら、その職しやくを、あ、こ、ら、ん、と、
 尋たづね、わ、り、を、列座れつざの中ちゆうより、一人ひとり、さ、み、出い、出で、集あ、集あ、わ、り、を、
 先鋒せんぽうた、ら、ん、と、云い、ひ、り、を、諸人しよじん驚おど、わ、ひ、て、是こゝを、見み、る、と、虎こ

繪本通俗三國志八篇卷之三

侯許褚が子に許儀とあり猛將なり。滿坐一同に其の女
 又ありてせんべ叶すと云りて六鍾會なり。汝の虎体稜
 班の將よりて父子とも名を得たり。然將も一同に汝を
 かの叶すと云りて汝先鋒の印とつけて五千余騎と一千人
 の歩武者とを領し直に漢中へ進んで三手に分ち汝中軍
 として斜谷より出左備と駱谷より出右備と子午谷よ
 り出せ此路の隘も險阻艱難の地なり汝兵を下知し
 山よりあつて石を破水に臨んで橋を置て火も置ら
 ざるに汝の如しといひしに汝許儀令を受て真先へ進み鍾
 會十万余騎と率して己に打立りて汝百官とを遠く送
 りて是と云るに汝旗日て蔽ひ鎗戈霜と凝り人強く馬

壯に威風凜凜たり人々を羨むといふのは中
 國參軍劉寔といふもの冷笑して立りて大尉王祥
 を怪し。馬上にて問て曰く。今鄧艾鍾會兩大將と
 て男も女も必に功を成んとあひいふに劉寔は答て曰く
 汝らも男と滅せんとせども二人とも再び都へ回るとを
 得て王祥の故を問ふ劉寔は打笑つて答て曰く
 在人ありとして強て問を百官と共に回らる。去程に征西
 將軍鄧艾は兼て陝西に居たりしが司馬昭が命を受て
 之の司馬望と西卷の國を下し。胡の衆を集めて雍州の
 刺史懿も緒天水の大守王頌陝西の大守楊欣も衆を催
 一日を経て雲霞の如く集りて一日を扱んで打立んと



と鄧艾ある夜の夢は高き山は上て漢中と直下は俄に脚
の下より泉もどがり出て水の勢は高く湧上ると見て打驚
き遍身は汗を流して次の日珍虜護衛幾部として周易を
のたるものや口夢の吉凶を占せしむるに緩部が曰く易は山上
有水曰蹇蹇利西南不利東北と有り。孔子の曰く蹇は
利西南と有り往有功有り。不利東北と有り其道窮なり。是
を以て按ざるは將軍ありて罵を滅し世は希なる
功を立まらん但惜く蹇滞しく回るるに能はずといひし
るに鄧艾慨然として心喜びて己は暮ら及んで鍾會が方
より檄文きたり。共は進んで漢中に出て合人と告ぐに
鄧艾はてだ手配を定め雍及の刺史魏延緒は二万五千余

騎を付けて姜維が取る路を塞がせ天水の太守王頎は二万五
千余騎を付けて左より沓中で攻ませ陝西の太守牽弘は二万
五千余騎を付けて右より沓中で攻ませ金城の太守楊欣は
二万五千余騎を付けて甘肅より出て姜維が後を攻ませ我
身の三万の精兵を引いて跡をまたがめて進發を浩らざるを
方の早馬急を告げて漢中上と下へと騷動も姜維沓中
に在て此よりとき急ぎ成都を表として上り左車騎將軍
張翼は陽平関を守らせ右車騎將軍廖化は陰平橋
を守らせらるるに此二つは第一の要害なりて若失ふこと
は漢中を破る人又吳の國を便をさせて救の勢を
とめる人臣みづから沓中の勢を引いて敵を支ゆる人と奏し

る。とた後主劉禪ハ景耀五年で炎興元年と改め姜維が表とて大に驚た昏絶して地は倒しひらる。半時をりあつて魁り例の黄皓を召て。今魏の大將鄧艾鍾會大軍を引て攻来り姜維表と上て急て告いふとんまきと問ぬ人ハ黄皓が曰く是れ詐ちり。何故ハ姜維がやとて実ちり。とどろくせぬ。是れままでのゆもち元ハ己が高名ハ備んとて表奏するものハ幸ハ成都の内ハ年老たる神降の波女あり。神を供養してま。吉凶をきぬ急ちりものとて。問ぬ人ハ己ハ一ハ違ふ。後主ハとままたぐい後殿ハ香華と備へ燈燭と陳祿祭。認て彼波女を車にのせて宮中ハ精進龍床の上ハ坐せしめて後

主ハみづから香を焚て再持し右の事と告ぐ。又ハ彼波女ハ髪を乱し跣足より殿中と躍り廻ると杖百遍又床の上ハ盤旋も黄皓奏して曰く。ちとちとち神の乗移らせぬ。之傍の人をきりぞけて自ら祈念し。念し。後主ハれ。またたぐい左右の人を尽く追退け再持して祈り。波女喘洞たる色よて。ちる。我ハ蜀の國の地神ハ陛下ハ太平で樂し。何ぞ外ハ祈し。あらん。魏の國も牧羊乃内ハ尽く滅ぶ。争う。この國を攻ると。人ハ心と安ド。遊ビ樂む。念し。いひ。訖り。地ハ倒して。絶入らる。半時をり。魁り。後主ハ。たり。喜ハ。ハ。神の。告ち。疑う。あらん。とて。姜維が表と用い。ハ。黄金百

而錦百疋をうの波女に賜ひ日夜酒宴をのまむゆひの是に依
 て姜維をひく早馬をゆめて急を告るもどもの黄皓を
 藏して天子さらし知ゆの祿に諸方の合図及く相違し
 る由きより入るに鎮西將軍鍾會いとぎとの間は漢中と
 攻破として大軍備を推て進發をも先手の大将許儀の
 勇猛なること父も劣らぬものなりゆ今度第一の先陣と
 定やられ己が手柄を顯さんためは真先に進んだりけ
 るが一竹の山の南鄭関と名付蜀の大將盧遜と云も
 の五百余騎を固たりとすは先きの名も一息も
 破として諸軍を下知して上る此関は漢中第一の難所

又て門の前は細き橋を渡して下の岩石峭たる深き谷へま
 して一夫の守と守る方夫も通りがたきなること
 敵の寄ると交て矢倉の上は孔明が秘傳の連弩をもち
 鏃と毒をぬりて一張は十條の矢を放り魏の勢をゆる
 の坂と上て関門の前は近付るに盧遜を見たり合
 図の椰子を鳴ると程はとあり板千の弩をゆるん放てその
 矢雨よりもまげると魏の勢をゆるいで急も退かんこと
 る名は大木大石を轉しけたり死するもの板を
 谷の底は落して微塵もあらず許儀案を相違して鍾會が
 前は出たの関を通ると叶まるといひは鍾會が
 百騎をかりて引て来見え関の上より射下を矢雨よ

りゆ志げり急引退くとた城の上より望みんとく
盧遜五百余騎を率いて切て下る鍾會大いどろき
馬を打て走りくるが土橋をさぐるも馬の蹄ちり入て
屍風をたてさぐとく倒れり急飛下歩立
ちのて走ると盧遜は近く追付さへや討とぬとんへ
るて魏の大將荀愷ひきうへて矢と放ちり盧遜急
所を射らとて馬より倒れ落て死る鍾會はことごと
勢ひのめて攻上とと下知して大軍を一度進めり
蜀の大將を討て弩を放ちまひまると散乱
る魏の勢をさぐもちく打入て卒に南鄭関を乘り
る鍾會は荀愷が敵の大將を射て我を救ひ功を賞

して護軍大將に進め鞍置馬を鎧二領とて与へり荀
愷持謝して面目身にあまりとぞとたりる次は許儀と
召でヤルハ汝先手の大將を望しめん我再三戒め山を遇
ての路を開き水を遇ての橋をけ後陣の勢を滞らむるこ
とありれと云し我はく橋をさぐれば馬の蹄ちり入て己
は敵を討るべし荀愷が力に依て辛き命を逃きたり
汝も軍法を犯せり罪あるがたりとして引出して斬せん
と大將告て曰く許儀が罪まると重とせども彼
が父許褚は朝廷に功勞多くその名世上に懸はし
ゆかむる許儀が一命を扶け甘密の敵陣を破りてのち功を
以て罪を補はりし人鍾會怒てヤルハ軍中の法私を

鍾會と荀愷の事

くらげ我ゆし司馬晋公の命と背く生てよも置の心ま
 うとて卒の首と斬せしむる諸軍を震ひ怖る鍾會いて
 ぎ兵と進め息をも継せば攻入るる諸人の心安らば恨
 みるものも多りなり。蜀の大將王含は樂城と守り蔣斌は
 漢城と守り城どよ五千の勢ありしむる魏の大勢あると
 見てすまよりて出合を此よりて鍾會とある前軍李輔
 は命とて樂城と圍せ護軍荀愷は命とて漢城と圍せ諸
 將又下知してやがる兵貴神速といふ敵の備なきよの
 て速くよきとて陽安關を攻くる此關は蜀の大將
 蔣舒傳會二人まよりるが敵とて攻來るとやて蔣舒
 なる魏の勢二十万あるとやめむる中へ出ての勝負へ

らちよはじ只より守りて拒べし傳會が白くいやく魏の勢か
 ちいと之どもを遠路の疲と武者を程のりりあふま
 若して戦へむんを樂城も漢城も忽ち破るべし蔣舒心
 いまど決せむいふまをまこと論むるなり魏の勢とや門外ま
 で攻來るとひりやれり急ぎ矢倉の上でつる鍾會
 鞭をあげてよびりる我今十一万の勢とてあはまされ
 汝ホの速に降らば味方を用ひん若迷と執て延せむ
 して忽ち踏破り一人も逃まよし傳會を腹を
 立し蔣舒とてやめて關を守らせ自ら三千余騎を引きて真地
 暗に斬て下る魏の勢を真倒しよくり落され我きたると
 志りしむる傳會勝よのりて追りくるなり魏の大勢又一

又取て入るる傳會よりして関入んとさるるは敵の
うろてんちんぬ旗ども矢倉の上よりびるぐり門の上より將
舒吉とあばそ我己と魏と降しり。傳會も亦降しとよび
りしむ伝會勃然として大に怒り恩を忘る義を背り
賊あるの面目ありて天トの人よあんとおもひぞと罵り進で
関入んとさるる大木大石を投下して面を向へきより
き又後より魏の大駈をもた間もちり取用し逃入る路無り
しうの今のまじよまぢりとして左に衝右に突ちた叫んで戦
よ三十余騎の駈のあり火よりりりて天を仰ぐ中照
烈皇帝を祈念し臣の力尽て討死をも願ひ蜀の鬼とるの
敵を滅さんとしめて又馬を拍て敵の村雲立たる真中

入四方八面を斬て廻る敵の圍いよく重り傳會速に降
れとよびりりるる心怒て精神を料撒し命をたると戦
ひるが鎗も突れ矢も中で被たる甲も朱も入り人馬との
も疲もればまて賊の手もくらんよりへとして馬より飛下
みびくら首を刎て死より。鍾會もよよりて陽安関を
めとり城中に貯たる兵糧武具山のどくちりしうべし乃
内大に喜び諸軍に恩賞を与てまづらく人馬を息け
姜維大戦劍門関
鍾會とて陽安関を攻とり。今夜はまのち宿して馬
の足を休め明日又とまんとて諸軍城中に入て休
べ俄に西南の方より哄のき天にひいて出来る鍾會

ろたきう又出てのぞとこる敵一人ゆらんさう一ふんの
内深くあやしく謀軍あつたきよ至るまで眠ることほつた
の日の敵や寄るとして馬を鞍置鏡を堅て待たせしめ
へてその義もあつて一ふ夜又入て志づらく休ましとせしめ
己の三更の比に至りて又西南の方より哄の音天地をく
も鍾會の色を失ひ人をして生しせんせまむるも肯て目も
ものも一夜をけて四方を人として分て伏勢やあると尋し
又十里の間ちんの疑いたることゆちりしや鍾會は更
又安んずれば徒事とあらむとて四五日間逗留しる
毎夜うくのどく驚馬しるるに哄の音のびくと齊くさう
出てその方へきまき定む夜明て自ら及百騎を志た西南

の方を遠く見巡りるる向ふ一竹の山あり殺気四方を蓋ひ
愁雲舞まき布て霧山の頂と隠を鍾會馬を回し案内者
とせし山の名を問は郷道守官答て曰く是をあらはし
復た涪が蜀の大將黄忠と討し定軍山にて鍾會心
をいまくし思ひ驚馬を引回さんとせし何ともあは狂
風吹起り身の毛もよよやうなをなして俄に哄の音地を動し
敵十騎の兵風は順めて追蒐る魏の勢膽を冷して周章
慌き馬より落るもの敵を志らばなく城中に走入討し
たる兵を点檢する一人一騎も死せざ只手足を損し面
目も傷へるむらりて陰雲の内より多の人馬打て出せし
付て斬よと思ひしが却て人と殺され只一陣の旋風砂を



傳會
將舒
關上之村
自陽安關
之轉之下
大勇をあらわ



魏大

元立して。めりしと告るる。鍾會のよくあやし。降人。生
たる。蔣舒を召て。此辺に神の社を建てん。と問ふ。ま
たてや。ゆるん。此の社。一の。ゆき。ゆるん。が。定軍山。は。諸葛
孔明の墓あり。鍾會大まごらひて。曰く。初め。諸葛武侯の神
靈あり。自ら行て。祭らん。とて。次の日。定軍山。は。行て。孔明
が墓を拜し。太牢を備て。祭ると。祭文。曰く。
維大魏景元四年秋八月。鎮西將軍鍾會。致祭於
故漢丞相諸葛忠武侯之靈。曰。為帝王之傳紀。有
有盛有衰。得將相之扶持。以安以危。昔先生之
隱居。方遐世。無聞。遇昭烈之三顧。方欲平西夷。向
白帝之托孤。方繼之以死。出祁山而耀武。方神鬼

莫知。屯雄師於五丈原。方長星忽墜。山天意已絕。於
劉氏。方大數難移。今後主。世亂迷於酒色。方朝綱頽
廢。誠社稷崩摧。方月盈則虧。天子命予為大將。方
保民全國。先生照耀乎肝膽。方決不敢怠。謹拜陳
辭于墓下。方願垂聽納。三軍肅恐。而仰慕聖德。方
無不悲傷。望自神威。於風雲。方以符天。命安清
氣於山岳。方以順天時。嗚呼。尚饗。
鍾會祭了。方即時。風。雨。雲。霧。散。下。清風。習。習。細雨。
濛濛。方。斬。目。あり。て。天氣。晴。渡。方。魏。の。勢。方。益。益。を。
卸。て。墓。を。拜。し。尽。く。城。中。へ。回。て。心。安。く。休。り。方。鍾。會。の。
夢。あり。て。ふ。志。だ。ま。れ。其。夜。の。三。更。の。比。方。一。は。一。投。氣。

鍾會祭了。即時。風雨雲霧散下。清風習習。細雨。濛濛。方。斬。目。あり。て。天氣。晴。渡。方。魏。の。勢。方。益。益。を。卸。て。墓。を。拜。し。尽。く。城。中。へ。回。て。心。安。く。休。り。方。鍾。會。の。夢。あり。て。ふ。志。だ。ま。れ。其。夜。の。三。更。の。比。方。一。は。一。投。氣。

凛々として一人論中といふまき羽扇に持身は鶴毳毛
を被て面は冠玉のてい眉は江山の秀いあめ胸は
天地の機と藏し長八尺をくりあるが神仙のごとく飄々
として歩来る鍾會夢心地ふ起てまよひこむる人
に誰ぞと問ふ人の答てやうりや我今朝將軍の祭と
受たり願へ一言で囑さる漢の運をもて尽たる天
命の致さるるよりて力及びむとていやはから西川の民年
久しく兵革の患はあふて肝腦尽く地は塗るまよひ豈あ
はまざらんや將軍國の境に入ばよく手下の契り
法を生じて妾は百姓と怒をもとちあられとて袖を拂て去
るまよひ鍾會はけり人として走とあめ人ば忽ちまどらた覺

りのいよく奇異の思はは曉より起て謀大將と集ち夢
のりどもを結て是孔明の神靈ちりとして即時下知傳
て前軍の真先は白旗と立させ保國安民と大文字は
書て行所ごまよひ人殺せるものあらむ必む首と刎んと
法を生じて秋毫をくりも犯さるるろろ漢中の人民其
患は懐き再拜して生むる浩くは樂城の王含漢城の蔣
斌も拒むと能むとして門を開て降人とちり漢中尽く
鍾會は屬を山とた美維へ沓中は在て鄧艾が攻寄る
とき兵と揃て待ところ一番は天水の太守王傾馬とい
なす大音あげ我い大兵百万上將千員と揃て二十路は
配て罵と破る美維匹夫ちんぞ速に降らざるとまよひ

哄のききいあげらるる。姜維大に怒り。鎗と拵て突てり。戦ひ三合ちらざる。王傾さんぐまのて走りて。蜀の勢いきこも継む。二十里あやう追討し。志ろる。あゝ忽然とて。鼓のき地を動して。一手の勢打て出たり。姜維あどこへる。指上たる旗。西の太守。率弘り。いへ。公笑ひて。此木の奴原へ我對手。あらば蹴散して。弃よとて。又喚けり。けたり。いへ。魏の勢乱して。走り。十里をり。追う。け。暫息。いへ。居たる。あゝ。忽ち。哄の。芭。天地と崩して。一彪の勢。殺。生きて。真先の旗。いへ。魏の。西將軍。鄧艾。ちり。姜維。入。乱。とて。戦ひ。四方。八面。と。蒐。立。る。血。ハ。馬。蹄。蹴。立。屍。と。路。よ。ま。り。て。討。ひ。討。ひ。黒。烟。と。立。て。め。あ。ひ。る。蜀。

の勢。度。の。戦。ひ。人。馬。ま。疲。ま。て。志。ろ。由。小。勢。ち。り。れ。ば。鄧。艾。が。三。万。の。生。手。ま。り。ひ。び。ぐ。ん。色。ま。り。た。る。あ。ら。後。より。王。傾。率。弘。が。勢。ろ。り。い。へ。姜。維。ま。り。引。退。く。と。れ。早。馬。一。騎。後。陣。より。馳。来。り。甘。杏。の。陣。屋。で。魏。の。大。將。揚。攸。又。焼。ま。たり。と。告。ぐ。姜。維。大。に。ど。ら。た。諸。大。將。の。向。て。や。ら。る。へ。汝。ホ。つ。が。名。の。旗。と。立。て。此。不。て。退。く。暫。鄧。艾。が。勢。を。支。よ。我。の。間。は。自。ら。甘。杏。の。火。を。救。べ。し。と。後。陣。の。一。備。を。引。て。甘。杏。の。陣。に。至。る。と。た。火。焰。天。と。焦。り。て。残。る。不。あ。く。火。ろ。り。い。へ。急。ま。え。と。滅。ん。と。ま。る。魏。の。大。將。揚。攸。と。作。て。討。て。ら。る。姜。維。會。釈。も。あ。り。蒐。り。ま。り。揚。攸。の。敵。ま。り。山。路。を。望。ん。で。逃。走。る。姜。維。ま。り。追。う。け。山。

蜀の勢を度する戦ひ人馬を疲まて志ろ由小勢ちりれば

攻上らんとせむとて大木大石雨のごとく落しけり。引退らんとせむとて先づとて鄧艾を推せり。兵ども皆散こぼる。魏の大勢勝るのめり。十方より取巻る。姜維救十騎を引て田切小山上陣。取て救の勢を待居たり。時早馬きたり。魏の大將鍾會大軍を引て陽安関まで攻入味方尽く破る。傳命へ討れ。蔣舒へ降人となる。此より漢中已に魏に取らる。城の王含漢城の蔣斌も門を開て敵に降り。大將胡濟へ漢壽城を落て成都に逃去り。告る。姜維色を失。斯てへ叶まらして取ものも取あを。其夜に疆川の口より引る。金城の大守楊欣一軍を引て討てくる。姜維

ちいて蒐たり。楊欣一戦も及ばず。大に乱して逃走る。姜維まきり進けり。取て三度放の二門も中ぎり。腹を立て其弓を折して鎗を拵りて突んとせむ。乗たる馬前足で跌き倒れ落たり。乗てて楊欣引て斬てくる。姜維まきり起あがり。飛りて一鎗突る。楊欣の馬の腦をぐさし突たれ。魏の大勢一合せて楊欣を救ひ去る。姜維又馬を打のりて追討し進む。後より鄧艾大軍を引てよりまはを。姜維前後をえり。能く漢中の道より走らんとせむ。雍及び刺史諸葛緒といふもの大勢をたや陰平の橋を取切たり。報を姜維。四角八方より敵を受進退路なくして天を

喪せりしと嘆きしに副將審隨といふもの。やうやう此諸葛
緒へ雍及の刺史よてい。今まのちよ出たなむば雍及を取
沙汰しむべし諸葛緒をどうひて急よ来救ん其とたれ
て急よ陰平の橋を渡り。劍門関を固むべし漢中又とり
返さざらん。姜維の義まうとて。兵を孔函谷よ打入け
れば案のどく諸葛緒大いなるに孔函谷よ入たるべし
雍及の虚ちると取ん為ちる。我預の國を取らば天子
ちりて罪を正しむべし。自ら行て救んとて。さうさるる士
卒を残して橋を守らせ自ら雍及をまうして打向姜維之
を伺ひて急よ後陣を先陣と。陰平橋へ殺奔するは橋
を守り勢を尽く走らむべし。姜維敵の陣よ火を付て劍門関

陰平退く。諸葛緒の半途よ出て後よ火のあぐるを見付扱を
計よ落さむとたりとて。急よ取て入りしむとれ姜維橋をも
ぎて己よ半日よ及ぶりといひりしむ力と失ひて追ざりける。

鄧艾越山領龍成成都

姜維のむくの勢を引て陰平の橋をもた行るよ向す。一
手の勢馬烟を立てきたりしむと近きありてととあり。
敵よあらむ。左將軍張翼右將軍廖化あり。共よ喜び
てありてまの成都のまうと問よ張翼やうらふ近ごろ安ん
黄皓神降の波よと天子よまうら内裡よめりて吉凶を問
よの詞を信して。將軍の表と用いむ。是故よ漢中の破とん
んとて怖して兵を起して来るるよ陽安関をてよ鍾會よ



雜兵



楊攸

姜維

姜維血戰
 歩立よて
 楊攸を突
 んとて其
 その馬を
 執る

とられたり。廖化が曰く。今四面は敵と受て味方の兵糧
通ぜども不如。まりぞいて。劍関を守り。別は深き計を
さん。姜維の心をも決せ。此にて一軍して漢中をとり。久
さんと云る。亦も。魏の勢十方に分きて推よると。躁ま
る。と。廖化が曰く。白水へ路。挾して。大敵はあたら。速
やく。退いて。劍門関と固。敵の勢を分て。関を取
ば。我ホク。之を。まき。路。ち。う。ら。ん。姜維。さ。ま。ま。た。が。ひ。退。ひ。て。劍
門。関。を。入。ん。と。ま。ま。と。い。へ。ば。俄。に。鼓。を。鳴。り。吶。を。造。り。投。下。の。精
兵。勢。ひ。を。乘。り。斬。り。下。る。是。由。敵。を。あ。ら。で。馬。の。輔。國。將
軍。董。厥。が。三。万。余。騎。を。て。魏。の。勢。を。拒。ぐ。ん。為。り。生。た。る。あり。
今。大。勢。の。来。る。と。して。合。圍。の。鼓。を。打。て。四。方。の。伏。勢。を。く

く。起。り。が。却。て。味。方。ち。う。る。故。門。を。開。て。む。久。入。と。天子。酒。色
を。溺。り。て。黄。皓。が。魏。使。を。用。り。し。よ。と。詔。り。共。に。涙。を。ま
が。り。し。よ。と。姜。維。が。泣。き。し。よ。と。詔。將。の。泣。き。し。よ。と。我。ホ。ク。生
て。あ。ら。ん。が。た。り。へ。國。を。敵。に。取。ら。れ。し。よ。と。今。大。の。要。害。を。守
て。氣。力。を。兼。ひ。時。を。待。て。戦。つ。敵。の。勢。は。だ。い。は。疲。て。自。ら
乱。る。と。董。厥。が。曰。く。さ。の。不。よ。て。敵。を。支。た。り。と。も。成。都。の
内。一。人。も。志。う。る。と。ま。き。大。將。ち。う。若。敵。を。攻。ら。れ。る。と。都。は。と
ち。ま。ち。瓦。の。如。く。碎。く。と。姜。維。が。曰。く。成。都。へ。山。峭。谷。絶
て。敵。い。う。で。入。り。と。得。ん。少。し。も。心。よ。う。く。づ。ら。び。時。は。今。候。と
り。告。て。雍。州。の。刺。史。諸。葛。亮。と。し。よ。の。さ。た。又。陰。平。の。橋
を。燒。て。負。腹。と。立。た。の。不。よ。せ。来。る。と。報。り。し。よ。と。姜。維

自ら五千余騎と率いて打て出魏の甄かの真中へ蒐
入てさんぐは揉だりるは諸葛緒残少は討て我を
死よと逃走するその路くは棄たる馬物の具口之のへを不
もなるるは蜀の甄かたんと取て甘密は棄たつる物の
具といぬ取返しぬと喜び皆閑上は引入るる諸葛緒
はぐくは打成して引去りぞ死此と死鍾會が劍関を十里
へだて陣と取たるよとまき自ら行て敗軍の事を告げ
れば鍾會怒てナリくは我鄧艾と計を合せ汝は命トて
陰平の橋を守らせ姜維が回る路を塞むるは何ゆ
へは取逃したるぞ剩へいぬ又は下知もな死は兵とまきを
て多の人馬と失ひりは是は行ひぞ諸葛緒が曰く姜維

計を以て雍及は攻くる某とと救んとて打たなは
姜維引くは却て橋をとまき去り某の斬る雪かん
たや手勢を引て推よせ此のごくは敗軍なり鍾會は
よく怒り引出し首を斬と下知は監軍衛瓘は
さめて曰く今諸葛緒罪ありとの此の鄧艾が手
下は厲き大將なり然ると將軍の殺しは鄧艾
らあらば怒ておそくは不和の基とあらん斬る命を
扶て鄧艾を待て鍾會が曰く天子の勅を受司
馬晋公の命を領し大軍をとめて蜀を伐たは鄧艾を
りとも罪あらば誅とと何ぞ不和の基といふとあらん
のらくの大將を引集めて再三諫むは鍾會の一命

と扶て。諸葛然と檻車又囚へ洛陽又送らせて司馬昭が
手又渡し。雍乃の勢を留て己が手下に用ひる。鄧
艾のよりと傳聞て大に怒り。我鍾會と官職は高下
ある。とさら我へス。罵の疆を守りて國の爲に功方を
積り。鍾會いうちれ。漫に傲て。我手の大将と四討り
ぞと云れ。子鄧忠諫て。やるる。聖人も小不忍則
乱。大謀とあり。父いぬ。大なる功を建ゆいて。若一旦鍾會
と不和るとなれば。必を國家の大事と誤らん。鄧艾はよ
汝がゆゑも。理に當り。とりて上よ。色を現さば。と
どの心底に深く恨を含み。自ら十騎を率て。鍾會が
陣に。行鍾會とて。安て自ら。枚百騎の猛將と従へて。

出む。ス。と。鄧艾心の内を。も。と。喜ぶ。と。共。坐定て。賀
して。や。る。る。將軍を。漢中。で。攻取。め。て。蜀の。勢。入。り。
膽。と。冷。も。是。ま。上。の。朝廷。の。幸。あり。速。く。計。と。定。め。て。劍
關。を。破。り。鍾會。が。曰。く。今。劍關。を。破。る。よ。へ。如何。あり。計
と。用。め。ば。き。鄧艾。が。曰。く。辭。して。曰。く。某。不。才。も。争。う。計。と
を。ま。ら。ん。鍾會。再。三。問。く。と。ば。鄧艾。が。曰。く。某。が。愚。意。を。の
めて。料。も。一。手。の。勢。を。率。して。陰平。の。小。路。を。廻。り。漢中。の。德
陽亭。に。出。て。却。て。劍關。を。ま。り。西。の。方。百。里。斗。
奇。兵。を。用。ひ。て。直。に。成都。に。攻。入。り。姜維。を。率。て。劍關。を
棄。て。來。救。へ。ん。將軍。を。の。と。た。虚。の。計。に。進。め。必。全。く。功。を
ま。さ。ん。鍾會。大。に。喜。ん。で。曰。く。此。計。す。我。意。に。叶。へ。り。將軍

と争ふ成都をひかひひ某のふりて合図を待んとて酒宴
殺刺る及で鄧艾別て回ると鍾會手下の大將を集めて曰く
人々も鄧艾を計多きものなりと云ふが今日も是れを庸
才より用ゆるは是れを諸將の故と問ふ鍾會が曰く陰平
の路の嶺高く岩峭て鳥も翔りがたきある安んぞ兵を進
る事とゆるん若敵の勢百余人して要害を守らば彼ホとぐ
く谷の内は飢死せん我の法よりて正道より進む蜀を取
んと掌よりとりて後へく雲梯鉄炮の架を作らせ日夜
て分たむ劍関を攻たりし鄧艾の門外より馬のめりて
本陣より面りて大將を問て曰く今日鍾會は對面し
ゆひてはるる計ありひり鄧艾が曰く是れ實のふりて告

れバ鍾會の事と侮て芥のごとくも彼漢中と取て莫大の
功ありとす我り沓中にて姜維と田舎んへ彼争漢中を
取るとゆるん我り成都と取む其功多しなりも勝るべしと
て其夜陣屋を収めて陰平の小路とまひり劍関を離るる
下七百里より陣とす鍾會の事と問て冷笑ひ鄧艾を
愚ちりすとす鄧艾の計と定て書簡を調へ維陽へ人と上
せて司馬昭に法進を其書に曰く

切見蜀寇失其漢中還守劍関宜速乘之今遣精
兵從陰平由斜徑經漢德陽亭趣涪出劍関西百
里去成都二百余里奇兵衝其心腹劍関之中
還赴涪則會方軌而進若劍関之兵不還則應涪

城之兵寡矣。軍志有之曰：攻其無備，出其不意。今掩其空虚，破之必矣。謹此上聞，伏希照察。

鄧艾書簡を上げて後、尽く手下の大將を集めて、曰く「我今虚ののて成都を占むべし。取んとち、汝も志を同一し、国家の為に忠を致さば、其名万世に傳て、恩賞は子孫の家を照らすべし。面々よくいして、同じて、かゝる大功を立よ」と云り、これを謀軍。ま谷て曰く「願は將軍の命に従はん。鄧艾大に喜び、先子鄧忠は屈強の兵五千人と与て、甲盛るも被せ、斧鉞を以て山路を切開け、せ二三万余騎の精兵と扱て、腰に干飯と付、長き差繩と多く用意し、其たしは能く手を結付たり。是は岩石を登るべしとの登がたき、木を以て杖、石を以て杖、

又打つて登らん為の支度あり。十月、陰平を立て、百里づつ行て、三千の勢を残して、陣屋を作て守らし、顛崖峻谷、鳥もつづらたき、凡そ二十日あり、七百に超る。虎狼の号、音耳に盈て、松樹の風、敵の吠の聲を誤る。己は七百里の間、杖十、陣屋を作て、兵を残り置たり。今、二千人、騎二千、余騎あり、て人馬と、とぐく疲乏なり。進で、又一の嶺あり。摩天嶺と名く、殊さらり高岨て、一片の白雲、腰を巻ぐり、山石、屏風の如く、切立て、人馬一足も登ると、其邊を、鄧艾馬より下て、其邊を、鄧忠と始として、路を開く。二千人の勢、一、集て、啼居たり。如何なる故ぞと問ふ。鄧忠答て、此嶺の西



鄧艾父子
越摩天嶺
越蜀の成都
の圖を藪



の方へ石壁天に岨て路を閉じま術は。今まで千辛萬
苦を経て此のままでの来しうらむ力疲まで尽く此の死
せんとして哀む入鄧艾が曰く我をむ七百の難亦をえ
て二万八千の兵で道に残置たむ只二千の勢と餘せり。
若きの嶺とあゆめとたの麓へ乃ち蜀の江油城あり。たひ死
さとの恨は元より大将と士卒の情の兄弟の異とは汝
ホ志と墜さる力と尽くして此嶺とあゆめと希代乃功
せり。富貴と受て恩沢子孫に及ぶべし。諸軍さすも
激して命を棄んと勇るむ鄧艾大に喜び弑し馬と
追下さむ大半恙なく落着て身ぶるひて立たうらむ切心
安しと自ら毛氊とめて身と包と一番まらび落れば

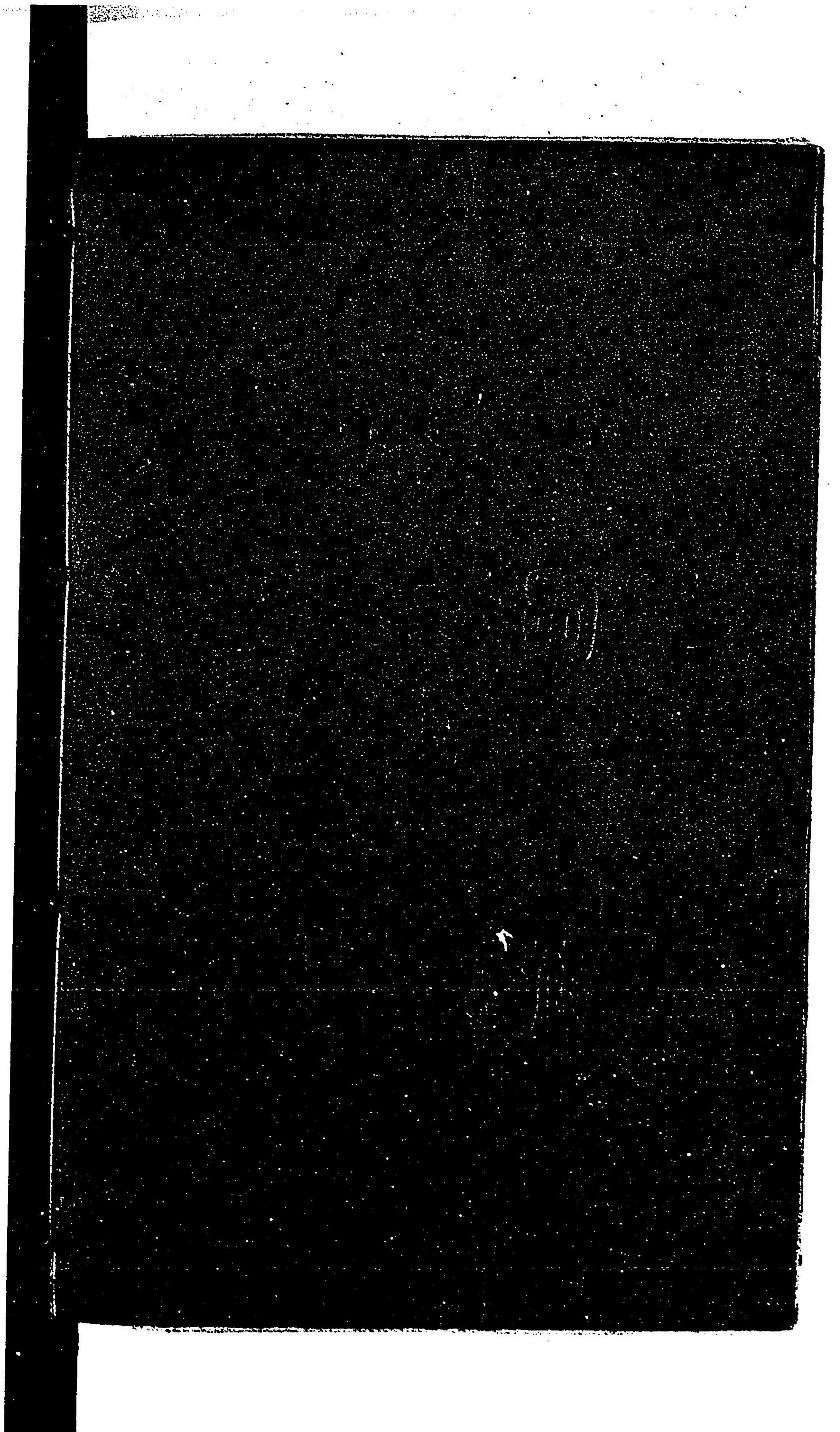
諸の大將も續てたて諸軍毛氊と持ざるもの一件乃差
繩で木の枝に着て人々の腰とくり魚を釣上たるごとく
よして兎角して流下一人も誤たど己は摩天嶺を越け
よへ此よてまぶらう息と休め馬物の具と調で進行し路の
側へ大石と立て。碑の文のり上は丞相諸葛孔明親題と
大文字とあり付たりうら近寄て之をえらむ其銘と曰く
二火初真 有人越此 二士爭衡
不久自死
鄧艾とて績で打撃も其石と再持してやらる。孔明の
真も神人なり我同世も生とて此人も事さるると恨む情
うらむと感嘆して山の傍に孔明の廟と立させ祭をさるる進

行^ゆ向^む又^{また}大^{おほ}なる陣^{ちん}屋^やあり是^{こゝ}は孔明^{こうめい}世^よ在^あり久^{ひさ}險^{けん}阻^そるれ
ど此^{こゝ}所^{ところ}で油^{あぶら}断^つせぬ常^{つね}に千^{せん}余^よ騎^きの兵^{へい}を置^おて日^ひ夜^や又^{また}用^{もち}心^{こゝろ}
たのし^しが近^{ちか}比^ひ後^ご主^{しゅ}劉^{りゅう}禪^{ぜん}の法^{はつ}を廢^たて此^{こゝ}の守^{まも}りも止^とたりと
告^つるものありんば鄧^{とう}艾^{がい}嗟^さ嘆^{たん}して休^{やす}む心^{こゝろ}の内^{うち}驚^{おど}馬^ば怕^{おそ}る謀^{まう}
軍^{ぐん}を集^あめてやらるる我^{われ}ホとの所^{ところ}まで来^きまども一^{ひと}足^{あし}も回^まるま
路^{みち}は前^{まへ}へ乃^{すなは}ち江^え油^{あぶら}城^{じやう}あり早^{はや}く攻^せ取^とて兵^{へい}糧^{りやう}をも使^{もち}ひ一^{ひと}
命^{いのち}を扶^{たす}ぐれと下^げ知^ちりんば二^{ふた}千^{せん}余^よ騎^きの兵^{へい}ども死^しを輕^{かろ}んじて
江^え油^{あぶら}城^{じやう}を攻^せ蒐^そる。

繪本通俗三國志八篇卷之三終



122
74
28





繪本通俗三國志
八編
三